

「富士講の中興の祖—^{じきぎょうみろく}食行身禄について」

高尾 隆

はじめに

富士山を信仰の対象として崇める行為は、古代から続く山岳信仰として続いてきた。その主体者は修験道者であり、自らを厳しく律し過酷な修行を積重ねることで、信仰心を昇華させて来た。

では江戸時代、庶民に広まった富士講の講員と言われる人々は前者とはどう違うのか？そこに食行身禄という伝説の人物が介在するのだが、残された文献は少なく、数少ない資料や遺品を数少ない研究者が研究しまとめたものしかない。

しかし、いまでも残る富士講の史跡に「食行身禄」の名は広く残されており、江戸八百講、八万講員と言われた人々にどうやって浸透していたのか解き明かしてみたい。

伊勢の人…食行身禄

食行は寛文 11 年 (1671) 伊勢国^{いちし}一志郡川上村の小林家の三男として生まれる。江戸に出て商いで身を立てるようになってからは伊藤伊兵衛と名乗っているが、子供の頃の名前は判らない。奥深い山間に暮らす小林家では茶の栽培や猫の額のような水田を耕作していた。

食い扶持を減らすためか養子に出されるが、二度逃げ帰ってくる。その理由はこの世に生まれて両親への恩に報いないのは人倫にも劣るからだ。両親は泣きその孝心に対し、気持ちを汲み江戸に奉公に出す。13歳。

奉公先は江戸で働く伊勢商人の縁者(本町三丁目)を頼った。道中金は三分と鳥目一貫文を腰に巻いた。江戸に着き道中金残金 900 文を親類に預ける。

その後江戸では様々な仕事に就いたと思われるがわからない。結婚して3人の娘をもうけるのは四十を過ぎてからのことで、これは奉公から身を立てた他の商人同様の苦勞であったと思われる。

富士講月行との出会い

17歳の時、富士講の祖・長谷川角行の流れを汲む月行(角行系4代)の弟子になる。明け六つに垢離をとる。茶と食事を富士仙元大菩薩等の神に上げ、神の恩徳にお礼をする。信仰は日常の勤勉な労働と一体化している。

近年の研究では食行が唱える「身禄の御世」を説いたのは月行(6P)であろうとされる。弟子も何人かいて食行もその一人であった。

「身禄の御世」とは人穴から生まれたチチ、ハハという二柱が「御藤山」をつくり、人間と「ぼさつ」を産んで増やしていった(角行系では伝統的に米を「菩薩」と呼んでいる)。人間生活における大事は、四民は勤勉に勉める事である。勤勉なものは「天と一体」になれる。

チチ ハハ
天南 僕
富士講独自の文字を作成

仕事を持つ食行が富士講に心酔し傾倒していった理由に、このようなわかりやすい考えと富士禅定をするには、修験道では100日の精進を経て同行を許すというものであったが、月行達は7日の精進で登れるという優しい規律にしていた。

入滅までの食行

食行は毎年6月に富士登山し、お鉢めぐりや中道まわりも三度行っていた。商いもそれなりの成功をおさめ、使用人も抱える位になっていたとされる。また晩年は江戸近郊へも済度(さいとう)を行うという信仰生活を送っていた。

しかし享保15年(1730)身禄は60歳の時、仙元大菩薩から教示を受けて、難行を8年勤めた後、心願(入定)を成就させる時が来たと決意する。入定とは「自殺」の意味。

家族やまわりの人間に、神の厚恩により富貴になったが自らこれらを捨てる。いまある財産を皆に分け与えると伝えた。

まわりの者は食行に「財産は子孫に譲渡するよう」説得するが、すべてを使用人や伊勢と江戸の親類、数年来の友人に分配してしまう。妻へはしらそという繊維の束と針を与え、娘たちへは教訓を授ける。

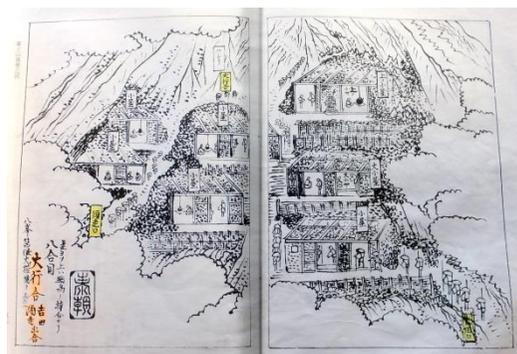
これから先飢える家庭であっても嘆いてはならない。私が富士で死んだ後に恋しく思ったら富士に向かってご詠歌とお言葉を捧げて三拝し、信心を強く持ち父への忠貞を重ねよ、さすれば仙元大菩薩のご加護が受けられるだろう。

この年、富士山禅定の後、人穴により東海道から初めて郷里川上村へ帰り、その後信濃路を経て江戸へ戻る。

江戸へ戻った食行は以後自ら厳しい戒律を課し、空いた時間は油売りとなり日銭を稼ぐ、それなりの稼ぎがあれば家へ米を持帰る。足りなければ本人が我慢する。

田辺十郎右衛門との出会い

享保16年(1731)も登山。後に江戸の富士講繁栄へのつながりとなる吉田に住む田辺との出会いが生まれる。田辺は代行合で水を売り、石室を持っていたようだ。息子の多吉(中雁丸/仙行真月)がそれを手伝っていた。



身禄はその石室で登山客に講釈をしていた。田辺は下山する時「ありがとうございました」と伝えた。すると食行は「あんたは(私の話の)何があるがたいんだ?」と問うた。

「あなたは行者の人々に大切な御仏の話をしている。長くここで仕事をしているが、あなたのような方は会ったことがない。あなたは仙元大菩薩と一体になっている。恐れながらあなたは仙元大菩薩の再来だと見受ける」と答えた。身禄は「甚だ満悦する」。

十郎右衛門は食行死後、**田辺近江**(北行鏡月)という御師になるのだが、この頃はまだ富士で働く人間でしかなかった。吉田には十八田辺という位、田辺姓は多かった。食行が夜中に大声で拝んでいたため宿から追い出したとされる宿坊・田辺伊賀とは親戚ではない。

吉田の御師

富士登山のための宿泊・案内業である。宗教的でないものとして宿泊・強力世話・山役銭(入山料)の徴収があり、宗教的なものとしては入山の修祓、信仰グッズの販売。18世紀半ばに「富士講」という商品を開発するまでは、富士山の本地は大日如来や不動明王で、山中の各所に薬師如来とか観音がいるというものだった。

御師は何かといえ、富士信仰を布教する宗教者だという場合があるが、近世彼らは名字帯刀を許された武士身分だった。(7P) 古くは武田信玄や小山田信茂に従軍したし、幕末には「蒼龍隊」という草莽隊を結成した。

近世初期以降、上吉田は天領で政治的に直接支配していたのは谷村、のちに石和の代官所である。

彼らが寒い時期にどうやって糊口をしのぐのかといえ、廻壇と配札である。彼らは顧客のことを檀家という。これらは懇意にする特定の富士講を除けば村単位で、どこの国のどこ村という形で管理する。これらの村を縄張りとして、強力に従者を連れ、手土産を持って、お札を売って回る。御師にとっては

数か月に及ぶ旅となる。この上がりが現金収入となる。そして御師同士ではこの村々は束ねた形で売買される。これを御師株という。

後に江戸近郊に起きた富士講は、こうして新規参入してきた田辺十郎右衛門やその子たちによって開発された商品だと考える。



行者一行は、白装束に金剛杖で六根清浄を唱えながら、富士に至るまで折々の禊場で身を浄め、登拝にあたりまず北口本宮富士浅間神社に参拝し強力に引率され登山する。彼らが町御師(⇨本御師)であるにも関わらず、近世中一後期に栄えたのは、角行系の富士講が従来の吉田で行われた富士信仰に対するイノベーションだったからだ。

乞食身禄一入滅の決意

油売りの行商をしている頃、食行家族は巢鴨の家を火事で失い、下級武士小泉文四郎(琢心一我)宅へ居候をしていた。

この頃すでに入定へのカウントダウンに入っていた食行は汚い身なりで風体も気にせず、商いも信仰の一貫として日々を送っていた。このことから後世、吉田の浅間神社大

改修に寄与し、吉田の人々に華々しい印象を与えた村上光清を「大名光清」と呼び、対し食行を「乞食身禄」と揶揄するようになる。



江戸で初めての 打毀し高間屋という 米問屋が襲撃された

享保 17 年（1732）西日本で起きた蝗害による不作（享保の大飢饉）の対応に、幕府は東海道諸国の米を大坂経由で被災地に回してしまった。そのため翌 18 年、江戸はコメ不足となり江戸で初めて打ちこわしが起きた。身禄は米問屋などの豪商に不信を抱き、自らが神となり彼らに鉄槌を加えようと考えた。

食行は入定を早める決意をする。6 月 10 日に出発と決め妻子 4 人と涙の別れをする。別れの盃は板橋宿、永田長四郎（同郷の知人で食行が「心行長照」という唯一行名を与えた人 6P 参照）宅で行った。

食行烏帽子岩に死す

享保 18 年 6 月 14 日未明 浅間神社裏の登山口から入定に用いる道具一式を馬に積んで富士へ向かい出立した。

大行合の田辺の石室に泊まり、午前 1 時頃から登り始め、3 時台に登頂する。薬師が嶽

（現久須志岳）。拝所でお身拔を広げ礼拝。入定地と決めた釈迦の割石に移る。割石に厨子を据え、身禄が籠り、田辺達が下山しようとした時、駿州大宮の大宮司より使いが来て「入定はもつてのほか、過去の例にあるよう諸国に不作をもたらす元となる」早々に下山せよとの達し。身禄や田辺は烏帽子岩へ移動する。改めて厨子を設営し、多吉（中雁丸）が雪を茶碗に盛って差し出す。

別れの言葉に「長年の大行は、末代の衆生にこの御山の恩徳を広めんと宿願である。よって末代にいたれば日本のみならず、唐土までもその徳が知れ渡るべきである。その理由は、富士が人間の元の父母だからである。」

『小泉文四郎覚書』に食行の最後を看取った田辺十郎右衛門が江戸に来て小泉らに語った内容が収められている。享保 18 年 7 月 13 日、食行の厨子は外から石が積まれた。そして 17 日までは生存したとされる。翌年 6 月石積みは壊れており、布団を頭からかぶり死んでいた。

食行身禄死後の富士講

田辺十郎右衛門（田辺近江）は身禄没後、吉田で御師株を取得し、元文年間（1736～1741）には身禄を信仰の対象として宣伝を始めていた。また食行の娘二女 万、三女花（食行正統とされる）や、小泉文六郎、永田長四郎などが食行の意志を継ぎ、江戸で教えを広めていった。しかし富士講が江戸市中で注目され出すのは高田藤四郎が高田富士を築いた安永 8 年（1779）頃からである。これまで

の食行に関する概略は中雁丸芳太夫(田辺十郎衛門の息子、幼年期多吉)が身禄の入定に遭遇した思い出を、明和8年(1771)身禄没後約40年近く経った本人が50歳頃まとめた「由来記」にある。さらに文献となるその写本を残したのが粉行三次こと岡本屋卯平衛(宇都宮在住)という小谷三志(禄行三志)の高弟である。

小谷三志(1765~1841)は江戸後期の富士講隆盛の象徴的存在で、当初鳩ヶ谷を中心に丸鳩講を興し、富士講の先達として、お焚き上げや吉凶の占いをやっていた。しかし文化年間、食行の直系・三女はな(一行花)の流れをくむ参行禄王と出会い、一行からの経典を受け継ぎ、不二道(不二考)を創設し、関東に5万とも10万とも言われる講社をつくった。小谷は富士山信仰を実践道徳と結び付け「家業精励・質素儉約・勤労奉仕・夫婦和合に努めることが富士の神に報いる行であり、よりよい社会の実現につながる」と唱えた。

江戸以降の富士講(明治~昭和)

明治初年になって、神職の世襲が禁止された。これは富士山周りの神社でも同じで、大宮の富士氏も吉田の各社神官の家も世襲できなくなった。そこへ東京の教部省から天下って、富士山周りの各神社を掌握したのが宍野半。彼は大宮の宮司を始め、下浅間などに君臨した。宍野は富士信仰を束ねて国家神道をめざし富士一山教会(講)を作って富士講をまとめようとしたが、吉田の村民に反対さ

れ上手くは行かなかった。しかし吉田の町は富士登山のメッカとして存続し続けた。

宗教団体としてではなくとも、庶民の富士への憧れは永遠だった。任意の講社はすそ野を広げ、明治以降も関東各地で富士塚は造られ、農家、大工、沿岸漁業従事者、果ては町内会に至るまで富士講という名のレジャーは浸透していった。

富士吉田は現中央線の開通により大月から浅間神社への参道となる金鳥居まで馬車鉄道が走り、織物産業などとあいまって町は繁栄した。

富士講の衰退そして消滅

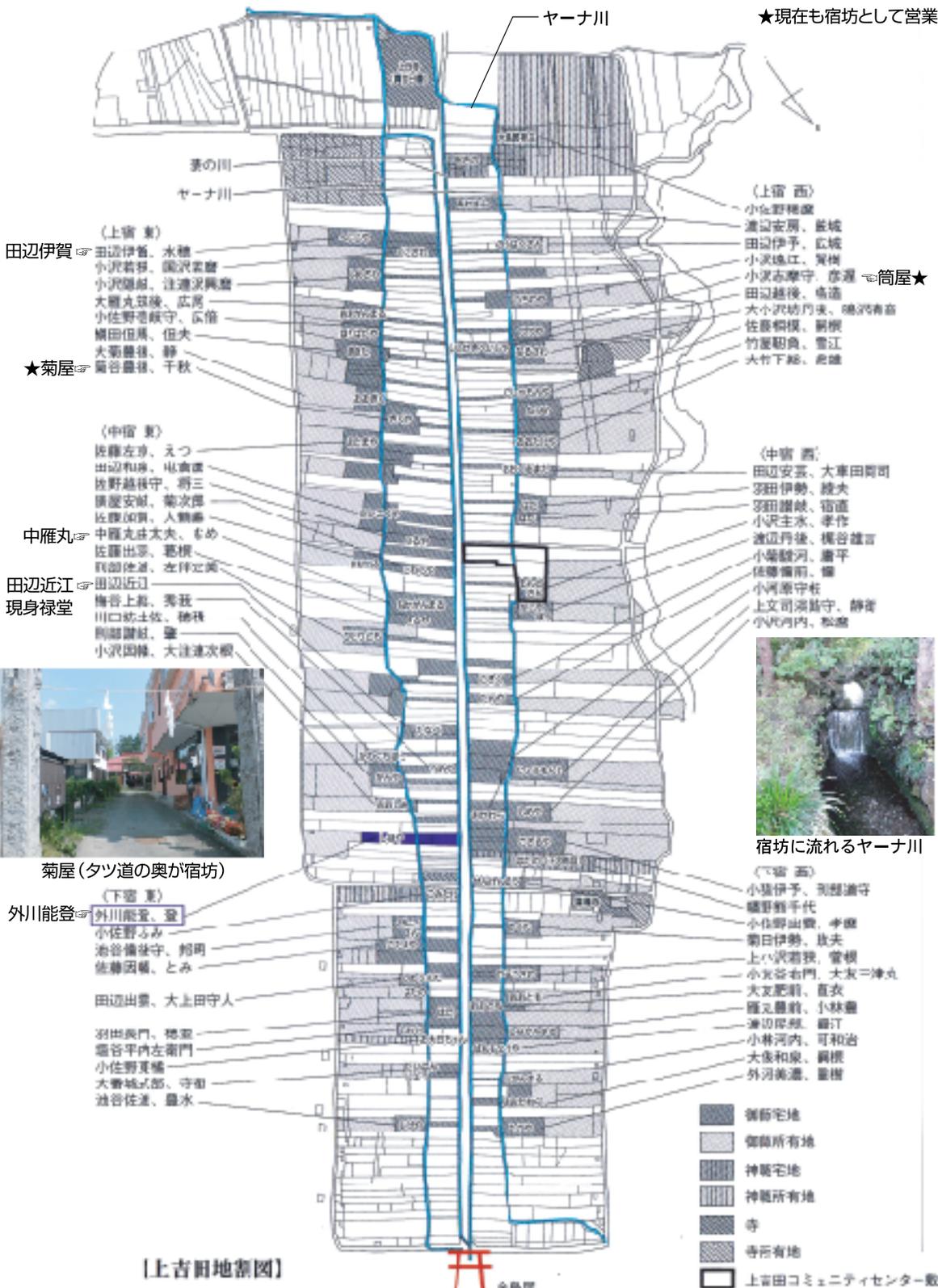
昭和の敗戦は一時的にも富士講という愉しみを完全にストップさせた。元々宗教性が薄いことから、一度途切れると元には戻り辛かった。やがて戦後復興とともに、車社会となり富士は誰にでも手軽に楽しめるレジャーとなる。現在わずかに活動を行っている講社はあるがやがてなくなるに違いない。



高田藤四郎の流れを汲む丸藤講(新宿)

<参考資料>大谷正幸著「中雁丸豊宗『富士山烏帽子岩身禄之由来記』を読む(岩田書院)

御師町吉田



宿坊に流れるヤーナ川